

シェイクスピアの「黒い婦人」

富原芳彰

シェイクスピアに登場する女性で、ある意味ではもつとも興味深い女性は、彼の『ソネット集』に出て来る女性である。彼女には固有の名前は與えられていない。われわれは彼女を「黒い婦人」(Dark Lady)と呼んでいる。彼女は、第一に、その肉體的特徴によってそう呼ばれるのであるが、それだけではない。彼女はシェイクスピアにとって魔性の魅力を持っていた女であり、さらに、われわれにとっては、謎の闇につつまれた女である。

シェイクスピアは、彼のソネット第一四四番においてつぎのように歌った。

われには慰めと絶望との二人の戀人あり、
雙方は二つの精靈のごとく常にわが心を誘う。

善靈はまこと白哲の美男子、

悪靈は色うるわしからぬ女性なり。

われをいち早く地獄に引き入れんとて、わが女魔は

わが善靈をわが側より誘い出し、

清らかなる彼に彼女の妖しき嬌美をもって言い寄り、

わが聖者を墮落せしめて悪魔になさんとす。

果してわが善靈變じて悪鬼となりしや、

疑いはあれども、しかと明言はなしがたし。

されど兩者ともわれより離れ、たがいに相親しめば、

われは推測す、一方の精靈は他方の地獄の中にあり

と。

しかれどもこは知るべくもなく、われはただ疑い

のうちにすぎさん、

わが悪靈のわが善靈を解き放たん時までは。

詩人は貴公子と思われる一人の青年を愛している。それは、言葉の十分なる意味において戀愛である。それはギリシア人が知っていたと思われるような戀愛である。そのような形で青年に戀愛する詩人の氣持は、たとえばつぎのようなソネット(第二〇番)になるものであった。

自然の女神が手ずから彩りし女の面を

君は持ちたまう、ああ、わが熱愛する男姫君よ。

女のやさしき心を持ちたまえど、移ろい變ることは

知りたまわず、世の不實なる女らのごとく。

君の眼は彼女らの眼にまさりて輝き、その動きも不實

ならず、

その打ち眺むるものをつねに金色に染む。

すべての容色を意のままになして容色いみじき男子、

男らの眼を奪い女らの靈を驚愕せしめる人よ。

君ははじめ女として創られたりしが、

自然の女神は君を作りつつふと戀慕の情を生じ、

附け物をして、君を想うわが心をあだとなしたり、

わがためには無用なる一つの物を附け加えて。

されど君は女性のたのしみにとて作られし人なれば、

ば、

われにはただ君の愛をのみたまえ、君の愛の實用

は彼女らの寶となして。

あるいはつぎのような言葉にもなった。

されば君のわが想いにおけるは食物の生命におけるが

ごとし、

あるいは甘美なる慈雨の大地におけるがごとし。

君の和親を得んとしてわが苦闘するさまは、

守錢奴がその財のためになすさまに同じ。

いまは享樂者として喜び誇れども、やがて

老齡という賊の來りてその寶を盗み去らんかと危惧

す。

ある時は君とただ二人してあるをこよなしと思ひ、

ある時はむしろわが喜びを世の人の目に見せしと思

う。

君の面を眺め眺めて飽食せりと思ふ時あれば、
やがてすぐ飢え渴えて一目だにたまえと願う。
君よりたまいはあるいは求めて得べきものをおきて、
他にわが持ちあるいは追い求める喜びはなき身なれば。

かくわれは日々飢えやつれまた飽く、
むさぼりてすべてを食らい、あるいはすべてを失
い去りて。(第七五番)

このように詩人は一人の青年を愛している。ところが、このように親密な心で結び合っている二人の間へ、一人の女性が介入して来た。そして詩人は、一人の青年を愛しつつも、同時に、その女性の性的魅力に惹かれる自分をどうすることもできない。そればかりでなく、相手の青年もまた、同じ女性の魅力に捉えられる。このようにして、普通の三角関係よりは複雑な一種の三角関係が生じた。そしてそれがシェイクスピアのソネット百五十四篇の基礎にある事情である。同じ青年を愛してわれわれの詩人の競争相手になるもう一人の詩人も登場するので、これを加えれば、あるいは四角関係になるかも知

れない。しかし、いまわれわれに必要なのは、詩人と青年と右の女性の三人であって、そして、詩人と青年との間に介入して来て、この両者の間の戀愛関係を亂すその女性が、「色うるわしからぬ女性」(「a woman colour'd」三)、すなわち「黒い婦人」である。

シェイクスピアの『ソネット集』を通観すると、ソネット第一番から第一二六番まで、すなわち集の大半において対象となっている人物は、詩人の戀愛する青年で、その青年に戀愛する詩人の起伏し曲折する心の複雑な綾がそこで歌われている。そしてその複雑な心理の綾を生み出す一つの要因として、「黒い婦人」をめぐる一件が導入されている(第三四番—第四二番)。以上に歌われた詩人と青年との戀愛をこの『ソネット集』の主要系列とするならば、第一二七番から第一五二番にいたる二十六のソネットは、すでに主要系列の中の一要素として登場した「黒い婦人」を改めて取り出し、これに對する詩人の心理的體驗を歌ったもので、いわば主要系列中の一支脈の精密化、ないしは副次的系列の展開である。(末尾の二つのソネットは、ともに愛の火の不滅を歌ったほぼ同一内容のもので、このソネット集全篇に對する結句をな

すものと見られる。)

詩人と青年との間に「黒い婦人」が介入して来て、詩人と青年との間に愛情の間隙を生じたことを最初に暗示しているのは第三二番のソネットである。

なぜに君はさしも麗らかなる日を約束して、
われをして外套もつけずに外出せしめながら、
途中にて不意にきたなき雨雲に出遭わせて、
君の輝く面を腐りたる煙霧の中に隠したまいしや。
雲間より洩れて、あらしに打たれたるわが顔の
雨を乾さんとなしたまうとも及ぶべからず。

すなわち、傷をなおすとも恥を癒さざらんには、
かかる薬膏を何人も良薬とは稱しがたければ。

君の羞恥もわが悲歎を醫するには足らず。
たとえ君悔いたまうとも、わが損失は依然たり。

罪を犯せし者の悔恨も、齋す救いは微弱たるのみ、
その強大なる罪の十字架を負いて苦しむ者に對して

は。

ああ、されど、君の愛情がそそぐ涙は眞珠なり、
その涙は貴し、あらゆる非行を贖うに足る。

詩人をしてこのように歌わしめた事情は、第四二番において、一そう明確にあらわれている。

君が彼女を有せることのみがわが悲痛にはあらず、
されどわれが彼女を深愛せしこともまた事實なり。
彼女が君を得しことこそわが主たる悲しみにして、
われをして一そう切に歎かしむる愛の損失なり。

愛の罪人たちよ、われはかく辯じて君らを許さん、
君はわれが彼女を愛するを知ればこそ彼女を愛するな
り、

彼女がわれに背くもまた同じくわがためなり、
わが友をしてわがために彼女を試さしめて、と。

われ君を失わんか、わが損失はわが愛する女の利得な
り、

われ彼女を失えば、その損失を拾いたるはわが友な
り。

両者はたがいを見出で、われは兩者を一時に失えど、
兩者はともにわがためにこの十字架をわれに負わしむ
るなり。

されどこは喜びなり、われとわが友とは一體なり。
甘き諛言や、されば彼女はわれ一人をのみ愛するなり。

詩人は一人の同性の青年に戀愛しているが、それと同時に一人の女性をも愛していた。しかるにその相手の青年もまたその同じ女性を愛しはじめ、かくして詩人は一時、同性および異性の、彼の二人の戀人を同時に失った。そういう事情をこのソネットはあきらかにしている。そして詩人は、青年が彼の女性を奪ったことよりも、その女性が彼の青年を奪ったことの方が自分には一そう悲しいと言っている。つまり、詩人は、自分の戀人(男)を奪った人がまた自分の戀人(女)であるという、複雑な心の體驗をしているのである。

われとわが友とに深傷を與えて
わが心を呻かす心こそ憎けれ。
われ一人を苦しめては足らず、
わが最愛の友までも賤奴とならしむるか。

君の殘酷なる眼はわれをわれより奪い去り、
また第二のわれを君はさらに手強く籠絡せり。
われは、彼にも、われにも、君にも捨てられて、
三重を三倍せる責苦ここに寄り集る。

わが心は君の鋼の胸の牢獄に投ずるとも、
わが友の心はわが貧しき心によりて保釋せよ。
何人がわれを看守するとも、わが心をして彼の守り役
たらしめよ。

しかれば君もわが牢内にて苛酷をなす能わず。
いな、君はなさん、われは君の中に閉じ込められ、
われとわが中なるすべてのものは必然君のものな
れば。(第一三三番)

戀し合う詩人と青年との雙方を惹きつけ、一時は二人の戀を危く裂きそうにまでした女、あるいは、右のソネットに歌われた詩人の意識によれば、戀し合う二人を一括して戀の虜囚としてしまった女、そういう一人の女をこの詩人は知っていたのである。

青年に對する戀が詩人にとって「慰め」であれば、この女に對する戀は彼に「絶望」をもたらし性質のもので

あった。彼女は彼に「拷問の苦しみ」(torment)を與える女であった。

ただちに眼差しをもって殺し、わが苦患を除きたまえ。(第一三九番)

ああ、君つれなくしてわが心に加えたる

この苦しみを不當となすなと言うは無理なり。

われに傷つくるも、君の眼にてせず、舌をもってせよ。力を振いて力づくにてせよ、手管もてわれを殺すなかれ。

君の愛は他所に向うと言え。されどわが前にては、

戀人よ、君の眼を横に流すことを止めたまえ。

何の必要ありて君はたくらみにて傷つくるや、

君の魅力は、すでに制壓せられたるわが防備の耐え得る限りにあらざる時。

われ君のために辯せん。ああ、わが戀人はよく知れるなり、

彼女の美しき眼差しがわれの敵にてあることを、

されば、彼女はわが敵をわが顔よりそらせて、

その毒矢の害を他のところに射させんとするなり、と。

されどその要なし、われはすでに死に瀕せり、

詩人をこのように苦しめる女は、ただに詩人の愛する青年を同じくその魅力で捉えたばかりではなく、その他多くの男に秋波を送るコケットであつたらしい。第一三七番のソネットでは、詩人は彼女を、the day where all Hen ride、(「萬人が入り來る灣」とも「すべての男が乗る栗毛馬」とも解せられる)とさえ呼んでいる。

金髪白哲をもって美人の條件とした當時一般の標準からすれば、「からすのごとく黒い」(「raven black」)眼を持ち(第一二七番)、

雪は白きか、しからは彼女の胸は淺黒し。

髪は針金か、彼女の頭には黒き針金生えり。(第一三〇番)

というこの女は、美人の語を持つては呼べなかつた。しかし、「美人」ではないはずの彼女が、ふしぎな、抗いがたい魅力で詩人を惹きつけ、狂おしいまでに彼の戀情を煽るのであつた。

わが戀は、いやましに病を募らせるものを
たえず憧れ求める熱病のごときものにして、
病を長びかせるものをむさぼり食らい、
定まりなき病める欲を満さんとす。

わが戀の主治醫たるわが理性は、
彼の處方が守られざることに怒り、
わが許を去りたれば、われはいま悟りぬ、
醫療を拒みしわが欲は死なりと。

理性に見離されたれば、われに治癒の見込なく、
はてしなき不安をいできて心狂亂す。

わが思うこともわが言うことも狂人のそれのごとく、
眞實を離れてとりとめもなく口走る空言たるのみ。

われは君を美しと誓い、君をかがやかしと思えど
も、

實は地獄のごとく黒く、夜のごとく暗ければな
り。(第一四七番)

こういう戀の拷問に煩悶する詩人は、これほどに彼を苦しめる當の人に向つて、つぎのような言葉をも述べなければならぬ。

ああ、酷き君よ、君は言い得るや、われ君を愛せずと、
われはわれ自身を敵となして君にくみしてあるを。
われ君を思わざるや、われはわれ自身を忘れて、
君のためにことごとく理不盡の暴君となりてあるを。

君を憎む者をわが友とわれ呼びしことありや、
君が眉をしかむる者にわれ諛うそいしことありや。

いな、君われに澁面せば、われはただちに

苦悶をもつてわが身に懲罰を加うるにあらざや。

高ぶりて君に奉仕することをさげすむものを、

われがわが身にありてわが徳と尊ぶものありや、

君の眼の動きに支配されてその命ずるがままに、

わが最善なるものこそぞつて君の缺點を崇める時。

されど、戀人よ、嫌いつづけよ、いまわれ君の心

を知る、

君が愛するは目明きなるに、われは盲目なり。

(第一四九番)

このように戀の地獄にのたうつ詩人も、常に彼女から拒まれていたわけではない。しかし、望みを達した時、

彼の心に訪れるものは、素寞とした魂の荒涼感ばかりであった。彼の欲望の達成は、さらに救いなき地獄の深みに彼を落すだけであった。つぎのごとき體驗はまさに凄壯と言うほかはない。

恥辱の荒野に靈を浪費するにほかならず、情欲の實行たる。實行の以前においても、情欲は偽誓なり、虐殺なり、殘忍なり、大汚辱なり、野蠻、過激、粗野、殘酷なり、不信なり。享樂せらるるやただちに輕蔑せらる。

理を越えて追ひ求められ、得らるるやただちに、理を越えて嫌惡せらる、それを食らうものを狂悶せしめんと

ことさらに仕掛けられたる生餌を呑み込みたるがごとくに。

追う間も狂なり、得たる時も狂なり、得たる後も、得つつある時も、得んと求むる時も過激なり、

實證せられざるうちは天福、實證せらるればまさに慘禍、

前には豫想されたる喜び、後には惡夢なり。

このことは世人よく知る、しかも一人よく知るなし、

この地獄に人を導くこの天國を避くべきことを。

(第一一九番)

これは、執拗に求愛するヴィーナスにアドーニスがつぎの言葉を思い出させるものである。

愛は雨上りの後の日射しのように心を喜ばせますが、色慾のもたらすものはうらかな陽光の後の暴風雨です。

愛のおだやかな春はいつまでも新鮮でいますが、

色慾の冬は、夏がまだ半ばもすぎないうちにやってきました。

愛は飽きることはありませんが、色慾は食べすぎて死にます。

愛はすべて誠、色慾はうそ偽りに満ちています。

(『ヴィーナスとアドーニス』、七九行―八〇四行)

そしてまた、ヴィーナスがみずからをつぎのように叙述する時、われわれは、たとえヴィーナスの眼は青くとも、そこにいるのは「黒い婦人」にきわめてよく似た人だという印象を消すことができない。

わたしのひたいをごらんになっても、しわ一つなく、眼は青く、かがやき、生々と動きます。

わたしの美しさは春と同じく年ごとに生い育ち、肉はやわらかくふくよかで、髓は燃えています。

なめらかにうるおいを帯びたこの手は、あなたの手に觸れられれば、

その掌の中でとろけて、溶けてなくなるかと思われましょう。

物語をせよとお命じく下さい、その耳を魅し去るよう

なお話をいたしましょう。

あるいは、妖精のように緑の野に足取り軽く踊り、あるいは、水精のように、長い髪をふり亂しつつ、足の跡も見せず砂上に舞いもたしまししょう。

(同書、一三九行—一四八行)

肉體が柔くしない、足取りが軽く、黒い眼がきらきらと光り、それがいつも生々と動いて、男の眼を捉え、男の心を誘う。若々しく活動的で、ふしぎな性的魅力を發散する女。そういう一人の女をわれわれは想像する。

そういうわれわれの想像に適合する女が、『ロミオとジュリエット』の中にも出て来る。ジュリエットではなく、舞臺には登場しない女だが、ロミオがジュリエットを知る前に戀した女で、ロミオをして朝まだき不眠の床を抜け出させ、悶々の思いを抱いてすずかけの森を散歩させる女である。すなわち、ロザラインである。ロミオの姿を見夫つたマキューシオが、たわむれの呪文を唱えて彼を呼ぶ中で、

南無、ロザライン姫のかがやく眼にかけ、

高きひたいと眞紅なす唇にかけ、

美しき足、眞直なる脚、打震える深もも、

さらにはその邊りなる禁斷の内庭にかけ、

いざや正體をあらわせよ、やい！ (二・二・一七—二

一)

と言って引合ひに出している女である。そしてさらに後(第二幕第四場)でマキユーシオは、「あの青白い無情な女、あのロザライン」と言い、「ロミオは白い女の黒い眼に刺し殺されている」と言っているのである。(白い肌は黒い眼を一そう際立てる。)

このロザラインは、『戀の骨折損』の中で、ビルーンを彼の誓いに反して戀の虜としてしまう女、名も同じロザラインとして登場する。彼女は、ナヴァール王の宮廷を訪れたフランスの王女に随伴する三人の侍女のうちの一入として舞臺に登場する。ビルーンは彼女を敘述して言う、

黒ビロードの眉をした白い浮氣女で、

二つの瀝青の玉を顔にはめて眼にしている。

そうだ、たとえ百眼を具える神アーガスが彼女を見守る宦官であつても、

いや間違いない、あのことはするという女だ。(二三・

一・一九八一二〇一)

通常の規準で言えば、彼女が三人の侍女のうちではいちばん美人でないはずのこともビルーンは知っている。それにもかかわらず、彼は彼女が戀しくて溜息をつき、一目見たいとこがれ、彼女を得させたままと祈るのである。王から、おまえの戀人は黒檀のように黒いとかからかわれると、ビルーンは答える、

黒檀というのは彼女に似ているのですか。ああ、神木だ。

そういう木でできた妻なら男冥利につきるといふものです。

ああ、誰か誓う人はいませんか。聖書はどこにあります。

わたしは誓いたいのです、美人も美人にあらず、彼女の眼より見るすべを習わざるにおいてはと。

どんな顔も彼女の顔のように黒くなければ美しいとは言えません。(四・三・二四八一二五三)

さらにつづけて王や友人たちから、君の戀人は煙突掃除のようだ、石炭掘りのようだ、エチオピア人のようだと

からかわれると、ビルーンは、

あなた方の戀人は雨が降れば外に出られないでしよう、
顔の色どりが流されては困りますからね。

とやり返す。この言葉は、紅白粉を塗って美を装っている女たちにくらべて、色は黒くても自然の美にかがやく自分の戀人の方がずっと美しい本當の美人だと歌った第一二七番のソネット（「黒い婦人」を歌う最初のソネット）を、われわれにただちに思い出させるものである。ビルーンはまた、

ああ、お天道さまにかけて、彼女の眼がなければ、本當だ、彼女の眼がなければ、おれは彼女に戀などしない。するものか、彼女のあの二つの眼がなければ。

（四・三・九一—〇）

と言っている。ソネットの「黒い婦人」の黒い眼とその黒い眼の動きに、特別の魅力があったことは、すでにわ

れわれの知っていることである。

『ロミオとジュリエット』でロミオを魅惑し、『戀の骨折損』でビルーンを戀の虜とした「黒い婦人」は、つきに『お氣に召すまま』では、羊飼の若者シルヴィアスを戀の痛手に悩ませる女羊飼フィービーとなってあらわれる。彼女のつれなさを責めるシルヴィアスに、彼女は、「おまえさんはわたしの眼には人を殺す力があるなんて言う。もしほんとにわたしの眼が傷を負わせることができるものなら、さあ存分に殺してあげる」（三・五・一〇—一六）などと言う女だ。そして、木陰からその場の光景を見ていた男裝のロザリンドは、出て来て、その「傲慢で無情な」女羊飼に向かって言う。

どうして僕を見るんだ。

自然の賣物の普通のものしか僕は君の中に

見てはいないんだからね。おやおや、

この女は僕の目まで籠絡するつもりらしい。

だめだめ、おねえちゃん、それは望んでも無駄だよ。

その墨のような眉毛、その黒い絹糸のような髪の毛、

その黒玉の眼とクリーム色の頬っぺたで

僕の心をなびかせて拜ませようたってだめだ。

そしてその後で、ロザリンドはつぎの有名なセリフを言うのである。

だが、おねえちゃん、身の程を知るものだ、ひざまづきなさい、

斷食して、いい男に思ってもらったことを神に感謝するのだ。

いいかい、親切に思っ言って上げるんだが、賣れる時に賣るものだ、あんたはいつこの市場にも出られるってものじゃない。

男に詫び、男を愛し、男の言うことをききなさい。

醜く脇鐵などくわすと、醜いのがこの上なく醜くなる。(三・五・五七―六二)

ロザリンドがフィービーにこういう言葉を使う時、彼女にそれを言わせた作者シェイクスピアには、フィービーのほかに、この言葉を聞かせたかった現實の女が、舞臺の外にいたであろうと想像することは、おそらく許され

ることであろう。

叱られながらすでにあやしげな目つきで男装のロザリンドを見はじめていたフィービーは、彼女が森の奥に立去って行くと、その後を見やりながら、「戀はみんな一目惚れ」などとうそぶいて、もうすっかりその方に心を移し、傍のシルヴィアなどはまったく眼中にない。おそらく、ここを書く時、シェイクスピアは苦い笑いを浮かべながら筆を進めていたであろう。

われわれがここまで追って來た「黒い婦人」は、そのふしぎな魅力と、その魅力に狂った自分のにがい思い出とがまじり入って、シェイクスピアの一生にわたって、彼の腦裡に残っていたようである。たとえば、トロイラスを惱殺するクレシダ(『トロイラスとクレシダ』)や、アントニーを魅了するクレオパトラ(『アントニーとクレオパトラ』)を描く時、シェイクスピアの意識の中で、彼女たちのイメージと「黒い婦人」のそれとがしばしば重なり合ったように感ずることも、單なる空想の仕業ではなさそうである。

以上を要するに、シェイクスピアは、若いころ、男の彼を戀に狂わせ、彼を戀の地獄に呻かせた一人の女、黒

髪黒眼、肌も淺黒い中に、かえって抗いがたい性的魅力
をたたえた一人のコケットを知っていた。そしてその女
が、彼に戀の地獄圖のような二十六篇の凄絶なソネット
を書かせ、彼の戯曲の中にもさまざまの扮装にかくれて
登場して來るのである。しからば、その「黒い婦人」と
は、現實には誰であつたか。われわれは當然それを知り
たく思う。

二

シェイクスピアの「黒い婦人」とは現實には誰であつ
たか。これははなはだ興味ある問題であるが、同時にま
た、それは非常に錯雜した事態にわれわれを引き込む問
題である。そして、要は、残念ながら、いまだ確立した
結論は出されていないのである。いや、永久に出そうも
ない。

そもそも、シェイクスピアの『ソネット集』の「黒い
婦人」が現實に存在したと豫想することは、シェイクス
ピアの『ソネット集』が、多かれ少かれ、自傳的なもの
であるという前提に立っているわけであるが、この點に
關してもすでに異論がある。その一つは、シェイクスピ

アの『ソネット集』をもつてまったく文學的虚構の作と
する説である。

シェイクスピアの當時、イギリスでは、ペトラルカに
ならつて、ソネット連作というものが流行した。サー・
フリップ・シドニーの『アストロフェルとステラ』、エ
ドモンド・スペンサーの『アモレットイ』（戀愛小曲集）
などはそのうちの名作である。シェイクスピアもそうい
う流行に乗じて、ある論者によればそれを諷刺する目的
で、彼のソネットを書いたのにすぎず、それらは彼の現
實の經驗とは直接には何の關係もないとするのが虚構説
である。しかし、シドニーにしても、スペンサーにして
も、ペトラルカのローラにあたるかれらの戀人を現實に
持つてかれらのソネット連作を書いている時、シェイク
スピアにだけそういう事情を否定するのはむしろ不自然
である。それよりも第一に、彼の『ソネット集』の中に
われわれが発見する人物と、それらの人物相互の間の關
係は、他所に見られないあまりに特殊なものであり、單
に時流に乗つての遊戯的作品とするには不必要に手がこ
みすぎている。まして、諷刺が目的なら、これはまったく
不必要なことをしていることであり、あるいはまったく

く目的にそぐわないことをしていることである。またそこに盛られた感情は、なかんずく「黒い婦人」に對する詩人の感情は、諷刺などというゆとりのあるものになるためには、直情でありすぎ、切實でありすぎる。

シェイクスピアの『ソネット集』を自傳的でないとする第二の説は、代作説である。すなわち、シェイクスピアは他の人の依頼を受けて、その人のためにあのようなソネットを書いたのであり、たとえそれらが現實の情況に對應するものであるにしても、その現實の情況に對してはシェイクスピアはただ第三者の立場に立つにすぎないと主張する説である。この集の最初の十七のソネットは、ある美貌の青年に早く結婚して子孫を残せとすすめているが、それらは、サウサンプトン伯の母親が、家系の行く末を案じて、息子を説得して結婚させるために、とくにシェイクスピアに依頼して作らせたものである、というような言い方でシェイクスピアの『ソネット集』を説明しようとするのが代作説であるが、もとより確證があるわけではなく、あくまで推論である。そしてこの推論も、シェイクスピアのソネットを諷刺を目的とした戯作であるとする説がわれわれを首肯せしめないのとは

ば同様の理由によって、われわれを首肯させないのである。

シェイクスピアの『ソネット集』の中に見られる個人關係がソネット連作の通例を破りすぎていること、その感情體驗、とくに「黒い婦人」に對する感情體驗はあまりにも個性的であることによって、彼のソネットには、そのすべてにはないにしても、そのきわめて多くの部分に、シェイクスピアの現實の體驗の裏付けがあると見るのが、もっとも自然な見方であると思われる。とくに、彼の戯曲まで考えると、通常は登場人物の顔貌の特徴をあまりに詳細にすることは避けているシェイクスピアが、二人のロザラインやフィービーなど、『ソネット集』の「黒い婦人」と同一人物と思われる人物にかぎって、その顔貌の特徴をきわめて特殊化し、詳細にしていることは、彼がそれらの人物の原型を、彼にとって特別の關心があり、現實に彼の身邊にいたにちがいない人に求めているとする想像を、十分に自然なものにするように思われる。

シェイクスピアの『ソネット集』がはじめて公刊されたのは一六〇九年であった。トマス・ソープ (Thomas

Thorpe) がシェイクスピアには無断で出版したものであった。その時ソープが記した献辞の中に、「以下のソネットの唯一の産出者 W・H 氏」(The Only Beggert of These Insuing Sonnets Mr. W. H.) とらう字句があり、それをめぐって、「W・H 氏」とは誰か、「産出者」とはどういう意味かなど、それが解明されれば、この集の成立事情が格段に明らかになると思われる問題があり、それぞれ複雑な種々の議論もなされているが、いまはそれらを顧慮している暇はなく、またそれらはいまならずしも必要な事柄でもない。

シェイクスピアの『ソネット集』がはじめて出版されたのは、いま述べたように、一六〇九年であったが、シェイクスピアがそれらを書いたのは、それより十年以上も前であった。シェイクスピアについて述べて「彼の親友間に流布している砂糖のように甘美なソネット」に言及しているフランシス・ミアズ (Francis Meres) の『パラディス・タミア、知恵の寶庫』(Paladis Tamia, Wits Treasury) という本が出たのは一五九八年の秋であった。したがって、その時までには、とにかく幾篇かのシェイクスピアの「砂糖のように甘美なソネット」は書

かれ、親友の間に流布され、そのことをミアズが知り、作品のいくつかを読み、そのことを彼の書物に記し、その書物が出版されるというだけの時間があつたわけである。翌一五九九年には、ウィリアム・ジャガード (William Jaggard) が「W・シェイクスピア著」と偽り記して、短詩二十篇を雑多に集めた小詩集『多情の巡禮』(The Passionate Pilgrim) を出版したが、その中にシェイクスピアのソネット二篇が盗まれて入っている。その二篇とは、字句にわずかの違いはあるが、今日の第一三八番と第一四四番とで、ともに「黒い婦人」を歌う系列に属するものであり、とくに後者は、この拙文の最初に引いた「われに二人の戀人あり」という一篇である。シェイクスピア傳記の權威 E・K・チェイムバーズは、一五九三年から九六年の間にシェイクスピアのソネットの大部分が書かれたとしている。しかし、シェイクスピアのソネットが書かれた年代については、あるいは、短期間に書かれたものか、長期間にわたって書かれたものかについては、さまざまな考え方がある。しかし、一つだけ確かなことは、シェイクスピアが「黒い婦人」を知つたのは、前記『多情の巡禮』が出版された一五九九年

(彼の三十五歳)よりは前だということである。

そこで現實の「黒い婦人」だが、これは、すでに述べたように、残念ながら確定できない。しかし、いくつかの推定ないしは臆測はなされている。このような推定ないしは臆測によって浮び上って來る最有力候補の一人は、エリザベス女王の侍女であったメアリ・フィットン(Mary Fitton)という女性である。しかし彼女のことを述べる前に、『ソネット集』中の三角關係の残りの一角をなす美貌の青年について觸れておくのが便利である。

この青年が誰であったかということは、『ソネット集』全體の中心にある一つの問題であるが、これがまた謎である。シェイクスピアの『ソネット集』は、謎を解くもっとも大事な鍵がまた謎である。しかし、ここでもまた推定はなされている。もっとも有力なのは、サウサンプトン伯ヘンリー・ロツツリー(Henry Wriothesley, Earl of Southampton, 1573—1624)と、一六〇一年父の後をついでハンプルック伯となったウィリアム・ハーバート(William Herbert, Earl of Pembroke, 1580—1630)とである。ともに貴族であり、ともに美貌であったと言われ、ともに親のすすめる結婚をしぶり、ともに

宮廷の侍女と關係を持って子を姙ませ、ともに女王の勘氣を蒙り、ともに投獄されたという、二人ともふしぎなほどよく似た經歷を持っている。そして、ともに文藝の愛好者であり、眷顧者であった。シェイクスピアが、兩者の深い交情を思わせる獻辭を附して、一五九三年に『ヴィーナスとアドーニス』を、翌年には『ルークリウス凌辱』を獻呈しているのはサウサンプトン伯であるが、シェイクスピアの最初の戯曲全集、いわゆる「第一・二折本」(1623)をその編者たちが獻呈しているのは、「これら〔の戯曲〕および生前それらの作者に對して非常な好意を賜った」ハンプルック伯(時に宮内大臣)とその弟に對してである。

サウサンプトン伯ヘンリー・ロツツリーは、一五七三年の生れで、シェイクスピアよりは九歳年下であった。父の死に伴ってサウサンプトン伯になったのが彼八歳の一五八一年で、時の権力者バリー卿ウィリアム・セシルに保育された。一五九〇年にバリー卿は自分の孫娘(オックスフォード伯の女)エリザベス・ド・ヴィア(Elizabeth de Vere)を彼にめあわせたいと思ひ、彼の母親もそれを熱心に望んだ(前記代作説参照)が、本人

は心進まず、エセックス伯に従って出征してしまった。

翌年の四月にはロンドンに歸っており、一五九三、四年にはシェイクスピアから前記二書の獻呈を受けた。一五九五年には、女王の侍女の一人で、エセックス伯のいとこに當るエリザベス・ヴァーノン (Elizabeth Vernon) と情事を持ち、子を妊娠せ、そのために女王の怒りに觸れ、投獄されたが、エセックス伯とともにアイルランドを平定するため出獄を許され、エリザベス・ヴァーノンが私生児を生む前に、彼女と正式に結婚した。

ペンブルック伯ウィリアム・ハーバートは、一五八〇年の生れで、シェイクスピアよりは十六歳年下であった。一五九五年、彼が十五歳の時、宮内大臣ハンスドン卿 (シェイクスピアの劇團の庇護者) の孫娘を許婚者とするをすすめられたが、財産問題がからんで破談となった。一五九七年には、オックスフォード伯のもう一人の娘で、十三になったばかりのブリジット・ド・ヴァア (Bridget de Vere) との縁談が起ったが、彼はあまり關心を示さず、むしろロンドンに出る許しを父から得ることに熱心で、その説得が效を奏して彼が上京したのは、正確にはわからないが、多分一五九八年の春、彼の

十九回目の誕生日のころであった。そして間もなく、女王の侍女の一人、問題の女性メアリ・フィットンと關係を持ち、彼女は一六〇一年に彼の子を生んだが、その子はすぐ死んだ。その醜聞のため、彼も女王の怒りを買って、女とともに、投獄され、一六〇三年に女王が死んでジェイムズ一世が即位するとともに許され、官職と名譽とを回復した。彼は結局メアリ・フィットンとは結婚せず、金持のメアリ・タルボットという婦人と結婚した點は、サウサンプトン伯の場合と異なる。

そこでメアリ・フィットンであるが、彼女は、チェンヤのゴーズワース (Gawsworth, Cheshire) という町の郷士 (squire) サー・エドワード・フィットンの娘で、一五九六年、十七歳の時ホワイトホール宮殿に出仕、エリザベス女王の侍女となった。父親は上京した娘の世話をして、宮廷會計官サー・ウィリアム・ノリス (Sir William Knollys) に託した。『十二夜』の中でシェイクスピアは彼をマルヴォーリオにしてからかかっていると説くホットスンのごとく學者もいる。宮廷に出たメアリ・フィットンのことをわれわれが最初に知るの、一六〇〇年の六月二十三日のことである。しかも、その時の記録は、す

でにして彼女の面目をうかがわせるに足るものがある。

その日、やはり女王の侍女の一人であった女性とウスター伯の息子との結婚を祝う行事の一つとして、宮廷で假面劇が行われた。メアリ・フィットンは八人の組のリーダーとなって踊ったが、一踊りすんだところで、八人がそれぞれもう八人の踊り手を選ぶことになった。すると、彼女は、臆するところなく六十七歳の女王のところへつかつかと進んで行って、女王に踊ることを所望した。その時女王は、あなたは何に扮しているのかと彼女にたずねた。「戀 (Affection) です」と彼女は答えた。「戀は浮気なものね」(“Affection is false.”)と女王は皮肉を言ったが、女王も彼女の魅力には勝てず、ついに立って踊った、というのである。

メアリ・フィットンは、足取りが軽やかで、踊りがうまかったらしい(前記ヴィーナスを参照)。シェイクスピアと同じ一座にいた喜劇役者で、モリス踊りの名手であったウィル・ケンブ (Will Kemp) は、『九日間の驚異』(Nine Days Wonder, 1600)と題して、彼がロンドンからノリッジまで道中踊りながら行った時の記録を本にしたが、彼はこれを他ならぬこのメアリ・フィットン

に獻じている。玄人の踊りの名人が、素人の踊りの名手に敬意と親愛を示したのである。またこのことは、メアリ・フィットンとシェイクスピアとを近づけて見せる一つのくさりでもある。ケンブが彼女にそれだけ親しかったとすれば、同じ劇團に属し、芝居の上演のために同じように宮廷や貴人の邸に出入したシェイクスピアが、彼女に近づき、あるいは彼女から近づかれたとしても、少しもふしぎはないであろう。そうして、あの「黒い婦人」のソネットが生れたとすれば……。話ははなはだスリリングであるが、もうわれわれは空想の世界の中へ入ってしまっている。しかし、あの魅惑的な黒い女ロザラインが出て来る『ロミオとジュリエット』と『戀の骨折損』は、メアリ・フィットンが宮廷に出て来てしばらくした一五九八年と九九年に、いずれも増補された形で出版されているのである。メアリ・フィットンが果して黒かったか、この点にも種々論議があるが、要するに今日では誰も知らないのである。

ソネット第一五二番において、詩人は相手の女に、「君は閨房の誓いを破って」(“thy bed-vow broke”)自分を愛人にしたと書いている。第一四二番にも、すで

に人の妻となつてゐる女の姦通を意味するらしい比喩が出て来る。このことは、メアリ・フィットンをソネットの女性とする説に對する大きな支障である。メアリ・フィットンは一六〇七年までは結婚していないからである。オックスフォードの宿屋「王冠屋」(Crown Inn)の女將ダヴィナント夫人(Mrs. Davenant)をソネットの女性だとする説には、小くともこの支障だけはない。

ダヴィナント夫人というのは、ベン・ジョンソンの後をついで桂冠詩人となつた劇作家ウィリアム・ダヴィナントの母親である。例のゴシップ蒐集家ジョン・オーブレーはこのウィリアム・ダヴィナントと親しく、一六六八年に彼の葬式に列席しているくらいで、彼のことはよく知っていたと思われるが、そのオーブレーがダヴィナントについて記している中に、シェイクスピアは、毎年ロンドンと郷里ストラットフォードとの間を往復する途上、オックスフォードの「王冠屋」に泊つたと書いてゐる。そして、その宿の主人ジョン・ダヴィナントは「非常にしかつめらしく慎重な市民」であり、その妻の方は、「非常に美しく、非常に頭がよく、會話がきわめてたのしい」人であつたと述べてゐる。オーブレーはさらにつ

づけて、劇作家のダヴィナントは、酒など飲むと、時々親しい友だちに、自分の母親は浮氣だという評判があつたこと、自分の作風はシェイクスピアに似ており、自分はシェイクスピアの息子だと思われても満足であることなどを語つたと傳へてゐる。堅物の旦那に少々退屈し、客に對しても少し愛想のよすぎる才色兼備の宿屋の女將といったイメージが浮んで来るが、これだけでは彼女をシェイクスピアの「黒い婦人」とするには不足である。一五九四年に出版された『ウィロビーのアイサ』(Willow-bie His Avisa)という詩がある。散文をまじえた對話體の詩で、ハドリアン・ドレル(Hadrian Dorrell)という人が序文でこの詩を讀者に紹介する形になつてゐるが、おそらく匿名で、眞の作者は不明である。アイサというのは、貞淑と美貌をもつて聞えた宿屋の女將である。ヘンリー・ウイロビー(H. W.)はこの女將に熱烈に戀し、その情を得たいとこがれるが、他の多くの求愛者と同様、少しも埒が開かない。ために憔悴した彼は、「親友 W・S」(Familiar friend, W. S.)に惱みを打明けて相談する。かつて同じ女に懸想して同じように「出血」の思いをしたことのある W・S は、こんどは見

物の側にまわって他の男のお手並を見てやろうという底意から、とてもだめなのを知りつつ、根氣よく口説けば女は容易に陥落するだろうとH・Wをけしかける。H・Wは懸命に言い寄るが、アヴィサはつらくも當らないかわりに、一向なびこうともしない。その間にH・Wはますます衰弱して来て、はじめ喜劇のつもりで仕組んだものが悲劇になりはじめる。それを見てW・SはまたさまざまにH・Wを慰めたり、勵ましたりするが、結局事は成らなかった。

『ウィロビーのアヴィサ』はこんな風なことをやや諷刺的に歌った詩であるが、篇中のアヴィサを前記ダヴィナント夫人、Henry Willobie (あるいは Henrico Willobego) を Henry Wriothlesley (サウサンプトン伯) W. S. (あるいは Will) を William Shakespeare とす

ると、これは、オックスフォードの「王冠屋」の女將ダヴィナント夫人を「黒い婦人」だとする説に有力な支持を興えるもののように見えて来る。その宿屋にはシェイクスピアは馴染客であつたらしいし、サウサンプトン伯は女王の行幸に供奉して一五九二年にオックスフォードを通り、あるいはその地に泊つたという推測もある。そうすれば、両者ともがその地の宿屋の魅惑的な女將にまいつてしまったということもあり得ないことではない。しかし、ここでもまたわれわれはすでに空想の領域に入つてしまつてゐるようである。ダヴィナント夫人が黒かつたかどうかはわからない。シェイクスピアを魔性の魅力で慥殺し、彼を戀の地獄に狂亂せしめた「黒い婦人」は、やはり謎の闇につつまれてゐる。

(一橋大學助教)